散策と思索の径

台湾で、ラフ人をたずねて

西本 陽一
金沢大学准教授

北タイの山地少数民族ラフ人の村落で、研究をしてきた筆者が、台湾を訪問することになった。この機会にラフ人を探してみようと思いたった。そこは意外な出会いに満ちていた。

資料館展示の看板
「異域を歩いて50年」

博望新村のメインストリート

昼から宴会をしていた某新村の人たち。
手前はラフ人で、奥のめがねをかけた女性は
タイ人

雲南、ミャンマーから台湾へ

ラフ人は中国の雲南省西南部からミャンマーのシャン州東部、タイ北部にかけて多く住んでいる。台湾にも少数だがラフ人がいることは、本で知った。たしかに、北タイで、あるラフ人を訪ねたとき、主人が台湾にいる親戚と電話で話していたことがある。一九四九年、中国での国共内戦に敗れた国民党軍の残党は、のちにミャンマーに逃れ、共産党政権への反攻を試みたが失敗して、台湾に逃れた。彼らのなかには、雲南やミャンマーの少数民族もふくまれていた。

ガイドブックで、かつて雲南で戦った人びとが住む「博望新村」のことを知った。博望新村にラフ人がいるかどうかわからないが、雲南の雰囲気をもつことを売りに観光化している。二〇〇七年には馬英九総統が慰問に訪れている。じつは、その地域に多い「～新村」は、どれも国民党軍の元兵士と家族たちの移住村だ。

村の門を入ると、民宿やレストランが並ぶ。「水擺夷」とか「西双版納」とか「滇緬」など雲南に因む文字が並んでいる。資料館には「異域を歩いて五〇年」という展示の看板もある。「異域」とは、アンディ・ラウ主演で、ミャンマーを拠点にゲリラ戦をしていた国民党軍残党を描いた映画のタイトルだ。

村の短い「メインストリート」に店が並び、お土産品や食品が並べられていた。元兵士の家族が暮らしていた長屋が、そのまま観光客相手の店や宿にかわったようすだった。漬け物を売っている女性に、下手な中国語でためしに話しかけてみた。

「ここにラフ人はいますか?」

「わたしの父はラフ人だったけど」と、Sというその女性は答えたが、ラフ語を話すことはできず、逆にわたしに「ラフ語ってどんなの? 喋ってみて。聞いてみたいから」といった。

亡くなった彼女の父親は、雲南とミャンマーで戦った元兵士だった。何もなかった周囲の山を苦労して開墾して耕して村を開いた。母親は雲南出身のワ人で、Sさん自身はこの村の生まれだった。

雲南の土司一族から台湾の国民的スター誕生

わたしはSさんの店で麺をごちそうになりながら、話をした。S姓の一族はもとは清朝時代の地方領主「土司」の家系だったという。「ラフのことを知りたければ叔公（父方の祖父の弟）に聞けばいい、今度『雲起雲落』という回顧録も出すそうだから」と彼女はいった。

「叔公には娘が四人いて、長女はS安妮というのよ。ドラマの『星星知我心』で演じていた子よ」

後で三〇歳代の台湾人から聞いた話では、『星星知我心』は国中の子どもが毎日見て泣いていたというほどの人気ドラマだった。また、これも後日談だが、わたしは台北にその叔公を訪ねた。彼の祖先は、もともと清朝期に雲南のラフ族地域に入植した漢族だといった。彼自身はラフ語を話せなかった。ラフ人土司の子孫として本を書いたが、自分がラフ人だという意識もないようだった。

傣族も、ラフ人も、タイ人も

Sさんの店を出た。外は暗くなっていた。Sさんは向かいの家の人にも、お母さんが何族か聞いてくれた。傣族だった。「わたしたちは一緒に暮らしているけれど、誰が何族かは知らないのよ」とSさんはいった。

また、ある雑貨店の年配女性も傣族だった。Sさんは、傣語は自分では話せないけれども、聞くのはわかるそうだ。博望新村には傣族が一番多いのである。さらに別の民宿では、ワ人のおばあさんにも会った。民宿は増築中で、日本語の建築材のカタログの説明を頼まれた。お嫁さんたちの会話は雲南方言だった。

次の日は、別の「新村」に行った。路地にテーブルを並べて、昼間から宴会をしている女性たちがいて、ひとりが傣族だった。ラフ人もそこにいたので、宴会に加わり、二時間ほどラフ語でお喋りした。

自称五〇歳のラフ人女性の素性は、何度聞いてもよくわからなかった。元兵士の家族でもなく、雲南の西双版納の出身で、雲南と台湾とを何カ月かずつ行ったり来たりしているという。「金を稼ぐには台湾がいい」そうだ。

タイ人もその近所に住んでいた。六〇過ぎの女性だ。東北タイの出身で、タイの領事館で働いていて、中国からやって来た今の夫と知り合い、一緒に移住してきたという。きれいな標準タイ語を話した。

ラフ人をたずねて行った。そこにラフ人がいた。だがラフ人たちは、自分がラフ人かどうかなど気にしていないようだった。いろんな民族的な素性の人がいたが、誰もそれを問題にしていなかった。気にしていたのは、よそ者だけだった。

開村当時の写真を使った博望新村の看板。
博望新村は雪が見られる観光地、
合歓山へと到る省道沿いにある

昼から宴会をしていた某新村の人たち。
右手は傣人